

IDEAジャパン ニュースレター

ハンセン病患者・快復者や、
すべての人々の尊厳の確立
を目指して

2013年 9月25日発行 16号

ご挨拶

理事長 森元美代治

9月に入ってやっと秋めいてまいりましたが、会員の皆様にはいかがお過ごしでしょうか？

本年4月6日、多磨全生園コミュニティーセンターで、「春うらら・講演&コンサート」がIDEAジャパン、ハンセン病問題を考える有志の会（カトリック・グループ）、多磨全生園入所者自治会の共催で行なわれました。当日は関東に嵐吹く大荒れの日でしたが、参加者は320人を越え、会場が満員になりました。IDEAジャパン会員の皆様にも多数ご参加いただき、ありがとうございました。

第1部の講演には、ハワイのカラウパパ療養所入所者をはじめ、世界の回復者の聞き取りを40年以上も続けている歴史家のアンウェイ・ローさんを講師としてアメリカからお迎えしました。アンウェイさんは、IDEAが発足した1994年から国際コーディネーターとしてご活躍で、今回の講演は「ハンセン病のいま～歴史保存と人権の確立をめざして」というテーマでした。世界各地に残るハンセン病施設と入所者の現在、周辺住民の係わり方など、長年に渡って取材してきたハンセン病の歴史を豊富な写真を使って分かりやすく解説してくださいました。

第2部は、活躍中のシンガーソングライターの沢知恵さんのコンサートです。沢さんはキリスト教の牧師であるご両親に連れられて、6歳のころから瀬戸内海にある大島青松園（高松市）を訪れていました。東京芸術大学を卒業後、全国でのコンサート活動のかたわら、青松園でコンサートを続けています。沢さんは、入所者で著名な詩人、塔和子さんの詩に曲を付けた弾き語り、観客に感動と音楽の素晴らしさを満喫させてくれました。

また、初めてのイベントでしたが、6月16日、IDEAジャパン、多磨全生園入所者自治会、笹川記念保健協力財団、JANNET（障害分野NGO連絡会）の共催で『隔離から共生へ ハンセン病療養所の「内」と「外」から社会を変える』をテーマにシンポジウムを開催しました。講師は鈴木禎一さん（ハンセン病首都圏市民の会代表）、私（IDEAジャ



セント・ヨルゲン病院教会（ハンセン病博物館内）でシグユー・サンドモさん（IDEAノルウェー）と。ベルゲン市（ノルウェー）2013年9月9日

パン理事長）、高久洋子さん（ハート相談センター相談員、ソーシャルワーカー）、佐久間建さん（都立武蔵台学園府中分教室ひだまり学級教諭）、村上絢子さん（フリーライター）で、それぞれがハンセン病とのかかわりについて述べたあと、質疑応答が熱心に行なわれました。初めての参加者も多く、またIDEAジャパンの会員も多数参加されて有意義なイベントであったため、今後もこのような学習会を持ちたいと主催者の世話人たちが話していました。

さて、IDEAジャパンは来年8月に設立10年目を迎えます。これまで会員の皆様の絶大なご支援により国内外において多岐にわたる活動を行うことができました。10年という大きな節目を機に、IDEAジャパンの今後について役員会で話し合っ決めていきたいと考えています。



春うらら 講演&コンサートには、荒天にもかかわらず園の内外から大勢の人が集まった。(写真上)

コンサートの後、お礼の挨拶をする森元理事長と入所者から渡された花束を手に、笑顔を見せる沢知恵さん/多磨全生園コミュニティーセンター

当事者の声を歴史に刻む世界的プロジェクト/「春うらら 講演&コンサート」に参加して

黒坂 愛衣 (埼玉大学非常勤講師)

4月6日の荒天のなかを出かけた、「春うらら 講演&コンサート」の感動、いまだ醒めやらず……。

講演されたアンウェイ・スキンスネス・ローさん(国際コーディネーター)は、世界各地のハンセン病施設で暮らす人々のライフストーリーを記録に残す、大きなプロジェクトをされてきた方。どうぜん言語は何か国語にもなるので、その言語を話せる人が聞き手をつとめることになる。ハンセン病を知らない若い世代や、もっとすごいのは、自分の親や祖父母がハンセン病だったという「第二世代」「第三世代」が聞き手をつとめ、このプロジェクトを通して人のつながりが生まれているということだ。

これまで、ハンセン病の人々の存在は、記憶と歴史から消されてきた。たとえば、世界最大のハンセン病患者収容がなされたフィリピンのクリオン島では、かつて何万人と収容されたはずなのに、入所者の墓碑は200ほどしかない(!)。別の国の収容施設では、入所者の墓はあっても、ぜんぶ無名の墓であった。その反省から、現在は、かつて入所していた人々の名前を刻む碑を建てる取り組みがされているとのことだ。

びっくりしたのは、ラトビアのタルシ病院で、ハンセン病患者として収容され長年生活してきた男性(ハンセン病自体はもう随分前に治癒していた)が、「2週間以内に出て行きなさい」と、いまになって立退きを迫られている状況があること。施設で生活するハンセン病回復者の「生存権」が脅かされている事態は、日本の療養所や、台湾の樂生院だけでなく、世界的な広がりがあるのかもしれない。

「聞かれてこなかったハンセン病の人々の声を歴史に残す」「人のつながり、コミュニティを守る」といった理念に、深く共感した講演でした。

沢知恵さんのコンサートは大盛況! わたしが参加している「ハンセン病首都圏市民の会」代表の鈴木禎一さん(97歳)は、車椅子で来場されていた。コンサート後にごあいさつすると、弾けるようなニコニコ顔(おいおい、いつもの会議のときには、そんな素敵な笑顔、見たことないぞ……笑)。わたしもすごくエネルギーをもらいました。音楽の力って偉大だなあ。



左端がビンティ・コフィファーさん

お礼の手紙／2013年5月20日

インドネシアの奨学生 ビンティ・コフィファー

拝啓 これまで2年間にわたり、インドネシア大学公衆衛生学科での私の学業を支援して頂きましてどうもありがとうございました。この場をお借りしまして、改めてIDEA ジャパンの皆さまと森元美代治さんに心より御礼申し上げます。

インドネシアの多くのハンセン病患者、回復者がほとんど教育を受けられない現実において、回復者として正式な高等教育を受けることで、その他の回復者の能力向上にも役立つことができればと思っております。本書をもちまして、インドネシア大学公衆衛生学科における学部教育3年目に対する支援をお願い申し上げます。

最終年の来年度は、公衆衛生研修と卒業論文研究が義務付けられており、その終了をもって大学を修了する予定です。

改めて、皆さまのご支援に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

敬具

* 学業継続支援のお願い *

ビンティ・コフィファーさんは1979年生まれの34歳で、現在インドネシア大学公衆衛生学科3年生です。もともと東ジャワ州出身で、アイルランガ大学で獣医学科に所属していましたが、20歳前後でハンセン病を発病、この時学業を途中で断念しました。

27、8歳の時、インドネシア初の回復者団体PerMaTaにスタッフとして採用され、設立されたばかりのPerMaTaの発展を裏方として地道に支えてきました。大学入学後も学業の傍らハンセン病関係の会議やイベントに積極的に参加し、当事者として、また公衆衛生を学ぶ学生として提言活動も行っています。

卒業後の就職先の第1希望は保健省、第2希望はNGOで、いずれにしても今後ハンセン病問題にかかわり、自分の経験と大学で得た知識を役立てたいと考えているそうです。

ところが、5月に左記のお礼の手紙が届いた後、ビンティさんから、卒業までの生活費を払うことができず学業を断念しようと考えているとの連絡が届きました。現在彼女はIDEA ジャパンと森元理事長からそれぞれ10万円ずつ学費支援を受けており、学費についてはそれでなんとか賄っていますが、貯蓄や単発の仕事の収入で支払ってきた生活費を払うことができなくなりました。学生のアルバイトを見つけるのは困難とのことでした。

彼女はあと2年で卒業できることから、ここで断念するのはとても残念ですので、IDEA ジャパンとしては会員の皆様に、ビンティさんの学業継続支援を呼びかけたいと考えています。お志のある方は、同封の払込取扱票に「寄付（ビンティ）」とご記入のうえ、11月末までにお振り込みくださいますようお願い申し上げます。

「根性と努力に惚れた」と夫に言われたの

理事 山内 きみ江

私がこんなに不自由なのに勝ち気なのは、親は障害をもっている子を一生面倒を見られないから、いかにして自立させるか、ということで厳しく育てられたからです。だから母親を「鬼ババア」とか、「どこから私を拾ってきたんだ」と言って困らせたことがあったけれど、いまになって思うと、そうやって厳しく育ててくれたからこそ、この年（79歳）になっても私は自立して生きられるんじゃないかと思うんです。

私は8人きょうだいの5番目で3女です。7歳のころから不自由になりましたが、兄嫁は私のことを百も承知でお嫁に来て、18年一緒に暮らしました。そのうち私がだんだん不自由になったので、見るに見かねたのでしょう。それに兄嫁の耳に「普通の病気じゃないよ」という噂が入っていたらしい。ある日、両親と兄の前で、「きみちゃんをこのまま置いといたら可哀想だ。知り合いのお医者さんが静岡にいるから連れて行きたい」と言って、静岡の病院に一緒に行ったの。

お医者さんと兄嫁のやり取りを聞いていたら、「やっぱりらい病なんだ」と思って、「私はらい病ですか？」と聞いたの。そうしたら、「あなたのほうから『らい病』と言うんじゃない、もう病気のことを知っているんだから、それ以上言うことはないけれど、もう病気は治りますよ」と言うんです。

その頃はハンセン病じゃなくて、らい病と言ったんです。私が昭和15年に7歳で小学校に上がったとき、校医が首の後ろの白い部分を指して「これは何だ？」と聞くので、「ここだけ感覚がない」と言った覚えがあるの。それがハンセン病の初期症状だったらしい。

昭和23年だったか、だんだん不自由になってきたので、静岡の日赤病院に行ったことがあるんです。診断名は「幼児慢性関節リウマチ」でした。その後この病院に行っても、日赤の先生が診断したんだから「おかしい」と言えなかったんじゃないかしら。ヤケドをしたり、裏傷ができたりすると、地方のお医者さんに行くんですけど、赤チンとか漢方薬を出してくれるだけで、治療が長くなるんですよ。18年もそんな状態ですから、家族は大変ですよ。私の治療費に本当に苦労したんです。

子ども時代は生活面では苦しかったけど、愛情面では恵まれていました。私が病気になってから母は厳しくなりましたが、父親は優しくかった。母親としては、私が不自由になっても自立して生きていけるように、



厳しくしたのでしょけれど、私はそんな母の気持ちかわからないから、ずいぶん恨みました。

いまではこんなに根性が強くなったけど、どれだけ泣いたか知れません。ご飯を食べるにしても、こんなに手が悪いから、箸が持てない。「食べろって言ったって、箸が持てないじゃないか」と言ったら、ある日豚小屋に連れて行かれて、「豚が餌を食べるところを見ろっ！」って。残飯を箱に入れると、豚は顔中ぐちゃぐちゃにして残飯を食べていた。「母さん、なんで私を豚と一緒にするんだ」と聞くと、「お前だって腹が減ったら豚のように食べるしかないよ」と、母親がふてくされた口をきくから、私も堪忍袋の緒が切れて、井ごと蹴飛ばしたんです。でも3日ぐらいでお腹が減ってどうしようもないの。誰も見ていないところで豚のご飯をクチャクチャすすったんです。鏡を見ると、豚とそっくり。鼻から口の周りからグチャグチャで、泣くに泣けないのね。悔しくて悔しくて。

後から聞いた話では、みんなそれを見ていて、「声を出して泣きたかったけど、口を押えて我慢していたんだよ。お前がそんな姿を人に見せたくはないという気持ちはよくわかるけど、生きるにはそうするしかない」。それは私が12歳か13歳のときでした。

昭和32年1月17日に多磨全生園に収容されたとき林芳信園長先生が言ってました。「あなたは家族と一緒に十何年も恵まれた状態で暮らせて幸せだった。本病は治っているし、体が不自由だというだけなんだから自宅にいてもいいですよ」。私が「でも、いったん『らい病』だと診断されたら、家族を傷つけるから入院します。帰っても元には戻れない。ここは良い病院だし、いっぱい患者さんがいるから、兄さん、一刻も早く家に帰って両親や兄嫁

さんを安心させてくれ」と言って、一緒に来た兄を追い返したんですよ。全生園に入ってからはずっと生き生きして、かえって太っちゃいました。独りぼっちだと思っていたら、こんなに同じような人がいるし、目の見えない人もいるし、体中に出来モノが出来て包帯を巻いていたり、ノドを切ってる人がいたり。そういう人を見たら、「ああ、可哀想だ。何か手伝えたら」と思って付き添いをしたり、目の見えない人の代筆をしたり、いろいろしました。

私は学校に行っていないから字を知らないでしょう。俳句の代筆はとくに難しかった。手偏もサンズイもシンニュウもノギ偏も知らなかった。その人は手の感覚がないから、背中に字を書いてみろと言うの。「ああ、それは海だよ」とか。そういうふうに分筆をしながら字を教わっていったの。最後には自分で俳句をつくるようになりました。いまでも覚えていますが、一番最初につくった俳句は、夏ごろでした。

熱帯夜 枕の位置の 定まらぬ

そうしたら、その人がビックリして、「字も書けないし読めないお前が、良い句をつくったなあ」と言ったので、それから自信がついて俳句も五行詩も書くようになりました。

いま私が一番力を入れたいことは、子どものイジメの問題です。いじめられて自殺したりするでしょう。周囲の大人が、「自殺する勇気があったら、歯向かうだけの根性を持ちなさい」と教えてほしいと思うの。私なんか男の子にいじめられて、毎日石を投げつけられて、ボコボコになっていた。あんまり悔しいから石を投げつけたら、いたずらっ子の眉間に当たったの。その子が家に帰って言い付けたんでしょう。その親が「うちのボンボンの眉間に傷を付けた」と、うちに怒鳴り込んで来たの。

そうしたら母が「親が文句を言いに来るのはおかしいじゃないか。お宅の子が直接きみ江に言えればいいでしょう。親も親だ。弱者をいじめるような育て方をするな。うちの子はコブだらけで帰ってきて、誰にやられたなんてひと言も言わない。歯を食いしばって帰ってくる。男の子なら、たくましく育てろ」。母がそう言うのを聞いて、「なるほどな」と思ったの。

いまの親は子どもがいじめられたら「可哀想」と言うけど、あんまりそう言ったら、自分でも死ぬしかないと思ってしまうでしょう。私は保育園とか

幼稚園の父母相手に話しに行くんですけど、「たしかにイジメは悪い。いじめられる方にも原因があるかもしれないけれど、“私も叩かれたら痛いよ”とか、“私だってイヤなんだよ”とか、“あなたがこう言われたら、どう思う？”とか言えるだけの反発心を持たなければだめですよ。そういう強い子に育ててほしい」と言うんです。

平成元年に小学校を卒業して40年目の同窓会がありました。会場は伊豆でした。新幹線で三島まで行ったら、観光バスの窓からみんなが顔を出して、「きみ江さん！」って私の名前を呼んでいるのでビックリ。

私に石をぶつけていじめた男の子もいて、「らい病で死んじゃったかと思ってたら、生きてたのか」と言うので、「誰が死ぬもんかい！」「お前は人に嫌われる病気をしても、こうして達者でいるんだなあ。強い人間だなあ」「あんたにいじめ抜かれたから、だんだん根性が座って、こんなに強くなったんだよ。らい病でいったって病気のひとつなんだ。病気は必ず治るんだから、ちっとも怖くないよ」と。そこで泣く人や、手を叩いてくれる人や。勇気を持って同窓会に行ったら良かったです。同窓会には一人で行って見たら、イヤな思いをするどころか、夜の2時まで私の部屋に集まって、みんなで夜通し話しました。

社会復帰したり、養女をもらったり、私は人並外れたことをするから、全生園の人たちに叩かれるのかしら。ちょうどハンセン病国賠裁判が終わって賠償金をもらったときだったので、「年寄りの賠償金が欲しくて養女になったんだろう」と娘はいじめられて苦労したんです。ひねくれた娘を真人間にしようと9年間苦労したけど、私はこの子の母親なんだと思うと、怖いことはちっとも無かったし、母親になれば、強くなるんだなと思いました。

人間だから間違えることもあるし、壁に突き当たることもある。とにかく生きていく過程には山坂あるし、七転び八起きです。どんなに厳しい道だって、歩いていくしかない。いまは孫もできて、こんな幸せがあるなんて思ってもいませんでした。

私は79歳。来年80歳だけど、「4回目の成人式」と言うんですよ。振袖は着られないから、せめて薄いピンクかブルーのドレスを着て写真を撮ってもらって、それに黒枠を付けて、遺影にしようと思ってます。もし来年の3月まで元気でいたら、4回目の成人式をお祝いしたいなと思っています。

夢も希望も大きく持たないの。

平成 24 年 4 月 1 日から平成 25 年 3 月 31 日まで

1. 事業の成果 (1) ハンセン病に対する差別・偏見除去のための啓発事業、(2) 国内外のハンセン病患者・快復者との交流及び支援事業、(3) ハンセン病関係の資料の収集・情報提供事業、の三事業を事業計画として掲げ、取り組んだ。

(1) 啓発事業については、①講演、②写真展の開催、③園内案内と国立ハンセン病資料館における説明、の3つが主なものであった。①講演等については、森元美代治理事長が40回、八重樫信之理事と村上絢子事務局長が1回行なった。②写真展については、八重樫信之理事が撮影した『輝いて生きる』の写真展を横浜の人権メッセージ展で開催した。③フィールドワーク(全生園と国立ハンセン病資料館案内)は、IDEA ジャパンに説明依頼があった団体に対して、森元理事長が23回案内し、説明した。①～③の受益対象者は合計6,258人を越え、啓発の面に関して多大な成果を上げた。

(2) 国内外のハンセン病患者・快復者との交流及び支援事業については、①生活改善のための支援、②奨学金支給、③交流、の3つが主なものであった。①については、HANDA (IDEA 中国)、IDEA インド、IDEA フィリピン(クリオン島)へ生活改善資金を提供した。②については、HANDA (IDEA 中国)、IDEA インド、IDEA フィリピン(クリオン島)、インドネシアの学生に奨学金を支給した。③については、2012年5月にセネカフォールズ(アメリカ、NY州)で開催されたIDEA国際集會に森元理事長夫妻が参加し、ハンセン病施設の世界遺産登録について討論し、交流を深めた。また青森市(松丘保養園)で開催された第8回ハンセン病市民学会に理事、会員多数が参加した。

(3) ハンセン病関係の資料の収集・情報提供事業については、①ニュースレター13号、14号、15号の発行、ホームページによる情報発信、②資料提供、③資料収集、④その他の活動がある。①ニュースレター13号は、森元理事長の恩師・内池慶四郎慶応大学名誉教授の追悼文を掲載した。時効・除斥期間の権威である内池教授の鑑定書がハンセン病国賠訴訟の勝訴判決に果たした功績に付いて書いた文章を掲載した。並里まさ子医師(おうえんポリクリニック院長)には、インドのハンセン病施設見学記を寄稿していただいた。新患者数12万6,800人と世界で最も患者数の多いインドの現状について、いまだに根強い偏見がハンセン病対策のネックになっていること、一般市民だけでなく医療従事者を含めて、啓発活動の必要性等があると指摘された。写真パネル展『輝いて生きる』開催について、八重樫信之理事がパネルの紹介と写真展について紹介した。

14号は、5月にセネカフォールズで開催されたIDEA国際集會について森元理事長が報告した。あらゆる人権問題と連携し、各国IDEAと協力して世界遺産登録を目標に活動しようと決意表明して、集會を終えた。

5月に開催されたハンセン病市民学会・家族部会で宇佐美治さん(長島愛生園)が60年ぶりに実家の甥御さんと会えたという、うれしい出来事が紹介された。長年、宇佐美さんをサポートしてきた難波幸矢さんがその間の事情を書いた「甥御さんが会ってくださった!」を掲載した。宇佐美さんは海外のIDEA会員とも交流を続けているので、外国人にも読めるように、このレポートを英訳して送付した。

15号は、11月23日に急逝した曾我野一美さん(元国賠裁判原告団代表)の追悼特集を組んだ。IDEA ジャパン発足時に推薦人を引き受けてくださった曾我野さんの功績を偲んで、森元理事長の追悼文と各国のIDEAから寄せられたメッセージを掲載した。また13年間、全生園の秋祭りに来園し、IDEA ジャパンのバザーに協力してくれる同志社女子高校生の感想文を紹介した。

1月24日、IDEA ジャパンの副理事長、柴田良平さんが肺炎でお亡くなりになり、社会復帰した先輩・後輩として親しくしていた、S・ショウジさんが寄稿してくださった。柴田さんの人柄、生きる姿勢などについて、当事者だからこそ書けた追悼文であった。

②資料提供については、「アジア・太平洋戦争とハンセン病～光田イズムを軸に考える」(東アジア学会編、村上絢子著)と、「森元美代治ーハンセン病回復者と家族の尊厳を取り戻し、共生できる社会の実現を」(文・歌代幸子、写真・八重樫信之)「IDEA ジャパンの活動～共に生きる社会を目指す～」(文・村上絢子)(両レポートとも韓哲文化財団の『青鶴4』に掲載)を配布した。

④その他の活動については、『失われた歳月』(鈴木重雄著)の再版に協力した。

IDEA ジャパン会計報告（2012 年度）

平成 24 年 4 月 1 日から平成 25 年 3 月 31 日まで

<収入>

入会金		7 人	7,000
年会費	正会員	22 人	160,000
	賛助会員	40 人	80,000
	特別正会員	1 人	50,000
	特別賛助会員	1 人	20,000
	寄付金	45 人	1,289,359
利息			144
ホテルキャンセル料返金分			7,144
合計			1,613,647

<支出>

1 事業費			
	(1) 啓発事業		134,537
	(2) 支援事業		1,207,802
	(3) 情報提供事業		255,248
合計			1,597,587

2 管理費

	給料手当		240,000
	消耗品費		702
	会議費		53,225
	通信運搬費		90,105
	印刷製品費		52,205
	雑費		6,940
合計			449,496

3 予備費

29,373

支出合計 $1,597,587 + 449,496 + 29,373 = 2,076,456$

<残高> $1,613,647 - 2,076,456 = \triangle 462,809$

<累計残高> $\triangle 462,809 + 2,135,625 = 1,672,816$

トピックス

(1) 毎年、高幡不動尊様から多額の寄付金を頂戴しています。他にも大勢の方たちから寄せられた寄付金と合わせて、インド、中国、フィリピン、インドネシアの回復者たちの生活改善資金や奨学金に充てさせていただきます。



(2) 8月25日、アメリカからホセ・ラミレス・ジュニアさん(写真右)とマグダレーナ夫人(IDEA アメリカ)が来日して、国立ハンセン病資料館で講演会がありました。ホセさんは高校時代に発病して霊柩車でカービル療養所(ルイジアナ州/アメリカ)に収容されました。家族とガールフレンドのマグダレーナさんの愛情に支えられて病気を克服し、大学で社会学を勉強してソーシャルワーカーの資格を取得。現在はマグダレーナさんと一緒にハンセン病の啓発活動を積極的に続けています。偏見・差別にさらされながら回復者が生きていくうえで、家族にどれほど勇気づけられたか等について話して下さいました。なお、ホセさんの自伝は『多磨』(多磨全生園自治会誌)に連載中です。



カービル療養所の生活やアメリカのハンセン病問題について語るホセさん/国立ハンセン病資料館

(3) 森元理事長夫妻が9月7日から22日まで、ベルゲン市(ノルウェー)のハンセン病博物館とアウシュビッツの強制収容所を見学したあと、ブリュッセル(ベルギー)で開催された国際ハンセン病学会& IDEA 国際集会に参加しました。80カ国以上からの参加者による盛大な会議の様子については、追って報告します。

会費納入のお願い

暮秋の候、皆様にはいよいよご壮健のことと拝察申し上げます。いつも IDEA ジャパンの活動にご理解・ご支援を賜り、感謝申し上げます。

今号の会計報告にもありますように、現在会費収入が減少していて、活動を続けるには寄付金に頼らざるを得ない状況です。まことに恐縮でございますが、今年度分の会費が未納の方は、会費を振り込んでくださいますようお願い申し上げます。今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。

理事長 森元 美代治

発行責任者 : 森元 美代治
特定非営利活動法人 IDEA ジャパン
<http://www.idea-jp.org/>
事務局 :
〒204-0012 東京都清瀬市中清戸 4-847
中清戸 4 丁目アパート 7-605
Tel&Fax 0424-93-6105

編集後記 : 村上 絢子

「春うらら 講演会&コンサート」「6・16 シンポジウム」のビッグイベントを他のグループと一緒に実現できたのは、約10年地道に活動を続け、国内外の人々との信頼関係が深まった結果だと感無量です。皆様の支えが大きな力となって、企画実現に向かって一歩踏み出すことができました。”たとえ一人でもいい、心に届きますように”との気持ちを込めて。

E-mail info@idea-jp.org

FAX 04-2925-8165